



東洋大学

ISSN 1881-0276

ライフデザイン学研究

Journal of Human Life Design

第 13 号

東 洋 大 学

ライフデザイン学部

目次

巻頭言

ライフデザイン学研究第13巻発刊を迎えて—ライフデザイン学の今日的意義—	本名 靖	3
---	------	---

退職者のメッセージ

東洋大学での13年間.....	角藤智津子	4
東洋大学での教員生活をふり返って.....	坂口 正治	6
ライフデザイン学部での13年間.....	白石 弘巳	8
退職にあたり.....	松尾 順一	10
Sayonara Japan	ランバート・ニコラス	12

総 説

ドイツにおける中世と近代の運動祭について.....	松尾 順一	15
---------------------------	-------	----

論 文

月刊絵本「こどものとも」に見る父親像・母親像.....	伊藤 美佳	31
韓国の精神保健福祉：歴史から展望へ.....	呉 恩恵	49
高齢者と文化消費—国際音楽祭を中心として—.....	大木 裕子	77
『ジゼル』におけるヴァリ伝承の変質	菊地 章太	93
幼児期における特別なニーズのある子どもの支援に関する研究	是枝喜代治／角藤智津子／杉田記代子／鈴木佐喜子	107
わが国の福祉サービス第三者評価制度の変遷から見る 「利用者の選択に資する情報提供」に関する考察	重田 史絵	133
保育者の養成における保育実習室の環境に関する一考察 ——乳児保育の学習環境と子育て支援の環境の共通点と相違点に焦点をあてて——	高山 静子	159
「子育てひろば」の実践から検討する特別支援学校幼稚部の地域貢献の可能性	田尻 由起／森澤 亮介	175
教員養成課程におけるアクティブラーニング型授業がもたらす学習効果 —教職に関する科目「教育制度論」における協同的で探究的な学習の結果から—	藤井 幹夫	189
全国の定期巡回随時対応型訪問介護看護と夜間対応型訪問介護の普及状況	渡辺 裕美	215

研究ノート

アメリカ合衆国コロラド州における保育者のキャリアアップを支えるシステムの構築 ～園評価及び専門性指標、専門研修、養成教育を連動させる試みの調査報告～内田 千春	241
障がい者スポーツのコーチング学的研究 ～指導者へのインタビューから～.....金子 元彦／森川 洋／吹田 真士	257
新しい制度である「幼保連携型認定こども園」に関する研究 ～10年間にわたるA幼保連携型認定こども園の研究を通して～角藤智津子／星 永／小菅 佳子	269
退院支援における相談支援事業所PSWの「かかわり」 ～長期入院精神障害者へのインタビュー調査から～.....國重 智宏	285
デンマークにおけるインクルーシブ教育の実際 ～フュン県及びオーフス県近郊の現地調査から～是枝喜代治／菅原麻衣子／角藤智津子／鈴木佐喜子／長谷川万由美	297
障害相談支援専門員とサービス管理責任者との連携に関する調査研究本名 靖／久田はずき／山中 幸	323
特別な支援を要する幼児・児童の多様性と支援 -外国人障害児に関する考察-南野奈津子	337
熊本地震におけるDCAT（災害派遣福祉チーム）に関する研究（第1報）八木 裕子	349
国内におけるスポーツと都市公園の関係：スポーツ参画人口増加に向けて山下 玲／過外 真帆／前田 柁／松山 桂／蔵並 香	359
研究報告	
車椅子および座位保持装置の製作と適合の現状と課題.....繁成 剛	375
未就学児をもつ母親の妊娠・出産期の記憶と育児体験認知との関連 ～妊娠・出産期の意味づけと子育て支援への考察～.....田村知栄子	395
プロジェクト研究報告	
「介護施設における福祉用具の活用と腰痛予防に関する研究」本名 靖／八木 裕子／岩本紗由美／繁成 剛	415
フランス語圏（La Francophonie）における障害者福祉施策に関する現状調査と 生活環境デザイン教育の可能性に関する研究（平成28年度：セネガル編）嶺 也守寛／水村 容子／是枝喜代治	419
高齢者の座位姿勢を改善する椅子のデザインと適合に関する研究繁成 剛／渡辺 裕美	437
東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規.....	451
東洋大学ライフデザイン学部紀要査読制度内規.....	454
東洋大学ライフデザイン学部紀要原稿執筆要領.....	456

ライフデザイン学研究第13巻発刊を迎えて

—ライフデザイン学の今日的意義—

生活支援学科生活支援学専攻 本名 靖

現代の日本社会では「少子・高齢化」の進行が著しい。合計特殊出生率をみると、第一次ベビーブーム期には4.3を超えていたが、1950（昭和25）年以降急激に低下し、1989（昭和64、平成元）年にはそれまで最低であった1966（昭和41）年（丙午：ひのえうま）の数値を下回る1.57を記録した。さらに、2005（平成17）年には過去最低である1.26まで落ち込む状況となっている。一方、100歳以上の高齢者は2017（平成29）年調査では、67,824人となり、この20年間で約6.7倍も増えていることが報告されている。さらに、多方面で「グローバル化」が推し進められていく状況にある。

このような状況下で、これまでの日本的な価値観や社会の仕組みだけでは対応が難しく、多様な価値観と選択肢が求められている。この時代と社会の潮流の中で、一人一人、自らの人生をどう描いて創造していくのかは国民全体にとって極めて重要な課題である。さまざまな人々の暮らしをどのように守り、健康寿命延を延ばし、暮らしの環境を整えていく方策を学問的に探求し、その支援策や解決策、あるいはその技術を科学的根拠を持って社会に提案していくことが求められている。これこそがまさに「ライフデザイン学」であり、多くの人が人生を考え、将来のあるべき姿を描いてゆくとき、「ライフデザイン学研究」に発表された研究成果が果たす役割は大きい。この「ライフデザイン学研究」からライフデザイン学の多彩な研究成果が発信され、ライフデザイン学が発展することで、多くの人びとの、より豊かで充実した暮らしを保障することに寄与できるものと期待する。

ライフデザイン学部教員、学生がライフデザイン学領域における研究および活動成果を発表するための機関誌として2006年3月に「ライフデザイン学研究（第1巻）」が創刊されてから、本巻の刊行で第13巻となる。この間、ライフデザイン学とは何かを模索し続けてきた。

ライフデザイン学が目指すものは、すべての人々にとってより良い生活とは何か、それを支援するための根拠を科学的に幅広く探求する営みであったように思える。社会関係、社会構造、制度、環境、健康、スポーツ等、それぞれの領域の研究を縦横に融合させ、より良いライフをどのようにデザインし、それを支援するための根拠を探求してきた歴史が「ライフデザイン学研究」として積み上げられてきた。本号は総説1篇、論文10篇、研究ノート9篇の掲載となり、それぞれが十分評価に値する内容となっていることを確信している。是非、多くの研究者、大学院生、学生の目に触れ、その内容が評価されることを期待したい。

東洋大学での13年間

生活支援学科子ども支援学専攻・角藤智津子

2005年の1月のことです。東京の池袋駅のコンコースに、ライフデザイン学部開学決定を告げる巨大なポスターが天井から何十枚も吊り下げられ、通る人々を驚かせました。ライフデザイン学部の設置認可が文部科学省から下り、学生募集が始まったのです。4月から東洋大学の教員になることが決まっていた私は、ライフデザイン学部開学準備室に「池袋がすごいことになっている！」と嬉しくてメールを送りました。

ライフデザイン学部が開学して間もなく、2005年4月11日月曜日に、社会学部社会福祉学科の先生方が、ライフデザイン学部生活支援学科の教員の歓迎会を開いてくださいました。新学部なので、迎える側がまだいないことへの配慮だったのだと思います。天野マキ先生の、「東洋大学へようこそ」のごあいさつに胸が熱くなりました。

生活支援学科の「幼児教育・保育コース」は4人の教員で始まり、保育実習や幼稚園実習先の確保、地域の子育て支援活動の開始、大学院の認可申請など、授業に加えてさまざまなことを行わねばなりません。ライフデザイン学部は人々の生活を直接支援する資格や免許を取得できる学部であるが故に、東洋大学ではこれまでに経験のない教材が必要となりました。「幼児教育・保育コース」に於いても、哺乳瓶やオムツなどの赤ちゃん用品や、野菜や肉などの調理実習の材料を使用するので、事務課職員の方々が一般の商店をかけ回って揃えてくださいました。

施設の整備も進み、ピアノ練習室10室ができると、朝霞事務課の若手男性数名で講義棟3階から本部棟2階までピアノ10台を運んでくださいました。東洋大に驚かされた、何回目かのできごとでした。保育・幼児教育においては、ピアノ演奏が音楽のすべてではありませんが、「ピアノがちゃんと弾けるか否か」は、耳で聞けば誰にでもわかることなので、ピアノ練習室で熱心にピアノや歌の練習をする学生さんの姿が日常的に見られます。

あれから13年が経ち、生活支援学科の「子ども支援学専攻」となり教員は13名に増えました。1学年100名の少人数教育ですので、丁寧な心の通った教育が可能となり、ゼミが全学年にあるため教員と学生の距離は近いと言えます。9回の卒業生を送り出し、幼稚園、保育所等の児童福祉施設で働く卒業生が増加したので、東洋大学で幼稚園教諭と保育士の養成をしていることが全国的にやっと認識されるようになりました。実習巡回訪問指導で幼稚園、保育所等の児童福祉施設に伺うと、立派に成長し実習生指導に携われるようになった卒業生に出会います。「教員をやっていて良かった」と思える瞬間です。

研究の面では、東洋大学では学外に自由に勉強に出かけられることや、サバティカル制度があることが本当にありがたかったです。「子ども支援学専攻」では各教員が年間30施設以上への実習巡回訪問指導があり、長期休暇中もまとまった研究時間を作ることができないので、サバティカルが来るのを楽しみにしていました。半年間、研究費をいただいて夢中で研究に没頭することができました。専

門の乳幼児の音楽教育に関する「日本の幼稚園に於ける一日の流れの歌」の題名で、博士（芸術）の学位を取ることができたのは、サバティカルの制度のおかげです。感謝しています。

また、平成26年度・27年度ライフデザイン学部プロジェクト研究費をいただいて、「井上円了の幼児教育理念と黎明期の京北幼稚園」のテーマで研究を行うことができたことも印象深いです。井上円了先生が京北幼稚園を創設された1905（明治38）年は、日本の幼稚園数313園、5歳児の就園率1.2%であったのですから、幼児教育の重要性を考えていらしたのだと思います。「東洋大学で幼児教育のプロフェッショナルを養成することを、井上円了先生も願っていたに違いない。」と想像を逞しくしています。

東洋大学での13年間は、楽しく充実した日々でした。ありがとうございました。



平成29年度 3・4年ゼミ生

東洋大学での教員生活をふり返って

健康スポーツ学科・坂口 正治

今、目を閉じて東洋大学での46年間の教員生活をふり返って見ると思い出のひとつ一つが走馬灯のように浮かんでいきます。

縁あって昭和46年4月に東洋大学短期大学に助手として教員生活のスタートを切ることができました。大学の組織すら十分理解できていない中で諸先生方や職員の皆様からの教えを受けながら3年間の助手生活を無事に過ごすことができました。

そして、昭和49年4月、専任講師となり初めて授業を担当した時のことは今でも鮮明に覚えています。学生たちを前に出席すらまともにとれずに緊張していた自分がいました。今になって思えばとても懐かしく思えます。そんな中でも観光学科の男子学生の授業では、年齢も近いことから兄貴のような感覚で学生とともに楽しく身体を動かしながら授業ができたように思います。

その頃、数名の学生から要望があり、バドミントン同好会を作り授業の合間に天井の低い体育館でシャトルを追いかけながら楽しく過ごした時間も忘れられません。そんな教え子たちも立派に成長して、それぞれが円満な家庭を持ち、時折、仲間たちが集まる会に誘ってもらい楽しいひと時を共有しています。また、授業では、レクリエーションの科目を中心に学内はもとより学外での「レクリエーション・野外活動実習」も思い出深いものとなりました。この頃、観光学科では、新入生教育の一環として一泊二日の研修を実施していました。2年生の学生リーダーを中心に運営されオリエンテーションに続きクラス対抗の運動会など観光学科ならではの行事も大変貴重であったように思います。そして、平成12年4月から短期大学が組織再編となり社会学部に移りました。

ここでも社会福祉とレクリエーションの新たな分野で多くの出会いがありました。社会福祉学科の卒業生が現場に出て、福祉の現場とのかかわりから施設の皆さんや作業所の皆さんとの行事の開催や夏季キャンプの実施など、様々な場面で楽しい活動ができたことも良き思い出となっています。

そして、平成17年4月よりライフデザイン学部に移り、新たな出会いと思い出ができました。ライフデザイン学部健康スポーツ学科では、レクリエーション論、レクリエーション実習、生涯スポーツ論等の専門科目を担当し理論と実技を通して楽しい授業ができました。

特に、野外活動実習では、豊かな自然環境のもとで、まさしく寝食を共にして、思いきり動き回って楽しそうに学習している学生たちの姿を目にすると、やりがいと生きがいを感じる瞬間でもあったように思います。

さらに、学科の行事として開催されているドイツ研修も思い出深いものがあります。ドイツ研修の初年度は、すべてが初めてのことで準備から実施に至るまで、全てが手探り状態で大変でしたが、ケルン体育大学の素晴らしい教育環境とそこで学んでいる学生たちの生き生きとした姿には、日本の学生たちとの違いを感じました。このドイツ研修が、回を重ねるごとに充実した研修になっていることを喜びに感じています。

また、ゼミ活動では、学内・外での活動を通して、学生たちと楽しい思い出となる活動が実践でき

たように思います。特に、ゼミ合宿は、野外活動実習を行っている長野県、菅平高原で実践してきましたが、朝・夕の自然の美しさ、昼間の活動なども思い出深いものとなっています。

最後になりましたが、46年間支えていただきました仲間の先生方をはじめ職員の皆様には、心より感謝申し上げます。そして、ライフデザイン学部の益々の発展を祈念申し上げます。

平成30年1月 研究室にて
坂口 正治



ライフデザイン学部での13年間

白石 弘 巳

私が、ライフデザイン学部が創設されたときに教員となることができたのは、「たまたま」が重なった結果です。たまたま、学部創設時に生活支援学科主任を務められた小澤温先生が私の前の職場で講演された時、名刺交換させていただいたことがご縁になりました。小澤先生から電話をいただいた約1週間後に別の大学からお誘いを受けたので、順番が逆さまであったら別の大学に勤務していた可能性が高かったと思います。

それから、今日に至るまで、平成21年箱根駅伝初優勝、平成26年スーパーグローバル大学創成支援タイプBへの採択など、東洋大学が世間から熱い視線を送られる中、ライフデザイン学部勤務できたのは、とても幸運でした。特に、不勉強な私は東洋大学に縁がなければ、現代にこそ生かすべき学祖井上円了先生の素晴らしい哲学に触れることがなかったと思われ、心より感謝しています。

でも、それまで大学で教えた経験がほとんどなかった私は戸惑うことも多く、授業での試行錯誤が続きました。13年目が終わろうとしている今も、授業の前には、長い時間かけてレジュメを作り、忘れ物がないよう細心の注意を払い、緊張して教室に向かっています。こんな私が、9期の卒業生を送り出し、生活支援学科主任、福祉社会デザイン研究科ヒューマンデザイン専攻主任、学部長などの重責を担わせていただけたのは、教職員の皆様の絶大なるご協力と、学生諸君の理解のお陰と深く感謝申し上げます。

この間、たくさんのお出来事がありましたが、学内の出来事で最も強く記憶に残っているのは、福川理事長、富岡朝霞市長はじめ多くの来賓の皆様にご臨席いただいて挙行することができた学部創設10周年の記念式典です。学外では、国の委員として、精神保健福祉士のカリキュラム改正に立ち会い、精神保健や精神医学の科目名や教えるべき内容の骨子をまとめる作業に従事し、以後8年間国家試験委員を務めてきました。また、前回の精神保健福祉法改正の検討チームの構成員として、保護者制度廃止を打ち出す作業に立ち会い、しかも、その改正内容が過渡期の改正と考えて主張した私の意見にほぼ沿った改正内容となったことを内心誇らしく思い出します。その他、世田谷区の障害者施策推進協議会や中央区の自立支援協議会に長くかかわらせていただき、多くの方々との出会いと貴重な学びの機会をいただきました。

これらに加え、社会貢献活動として、精神障害の患者さんの治療、ご家族の相談支援、専門家の研修などに携わらせていただいたことが私の宝となっています。長期入院の患者さんが退院された時のうれしい表情は忘れられません。井上円了先生の講演回数5000回には遠く及びませんが、各地の家族会の勉強会に呼んでいただいたり、精神保健福祉士の仲間らと協力して「家族と専門家の交流会」を20年以上続けたりしたことで、貴重な勉強をさせていただきました。東京都社会福祉協議会からは、毎年のように社会貢献型後見人の養成や苦情処理に関する担当者の研修に講師として呼んでいただきました。

最後の1年間には、大学に赴任した平成17年に発刊した拙著「家族のための統合失調症入門」の新

版の出版、平成22年度に実施した際にも委員長を務めさせていただいた全国精神保健福祉会連合会の会員に対するアンケート調査で再び委員長を務めさせていただくなど、当時を思い出させる感慨深い出来事が続きました。

13年間してきたことを、できれば、これからもずっと続けていきたいのですが、物事には終わりがあります。私は、高校生の頃自分が定年を迎えたときは、「見るべき程の事は見つ」という言葉を最期に遺した平家の武将平知盛のような心境で職場を去ることができたらと思ったことを覚えています。でも、大学を去るにあたって、現状はとてもそんな心境ではありません。私が在職していた平成19年に胃がんのため75歳で亡くなった作家の小田実氏は、書き遺すことがたくさんあって、最後までペンを握り続け、ペンを握れなくなった時には、テレビマイクに向かって声を遺しました。そのテレビ番組で紹介された、小田さんが自分自身を説得させるかのようにノートに書きつけていた言葉が今の私に一番しっくりきます。それは「これでよしとする」という一言です。

改めて、たくさんのいい思い出を残すことを許してくれた東洋大学の教職員の皆様、関係者の皆様に最大の感謝の言葉を申し上げ、ここまで自分なりに精一杯頑張ってきた自分をほめつつ、「これでよしとする」ことにします。

13年間、本当にありがとうございました。



退職にあたり

健康スポーツ学科・松尾 順一

平成17年の4月ライフデザイン学部の新設に伴い、健康スポーツ学科の教員として着任し、はや13年が過ぎ、平成30年の3月末日をもって退職を迎える。

東洋大学に着任する以前は都立の短大で27年間教鞭をとり、おもに体育実技や体育講義を担当し、クラブ活動では女子野球部の“迷監督”として全国大会にも出場していた。当時は、かなりの“実技派教員”であった。

東洋大学に着任してからは、健康スポーツ学科の人文・社会科学系の専門科目である、スポーツ史やヨーロッパのスポーツ文化や健康スポーツ学演習等の講義科目を担当させていただいた。専門科目を担当する喜びをかみ締めつつ、健康スポーツを学ぶ学生のための専門的教養を教授することに努めてきた。健康スポーツ学科の教育目的の一つは健康スポーツに関わる専門的指導者の養成であり、その専門的指導者にとって、実際の現場では、適切な判断力が強く求められる。研ぎ澄まされた判断力を養成するには、指導上の知識と並行し、専門的教養を総合的に習得することが求められる。このような見解に基づいて、学生たちには専門的知識を教授し、またスポーツ史の授業では、「何か問題があれば歴史に戻り、その原点を探れば将来に向けての解決の糸口が見いだせる、つまり過去から現在を射照し将来を展望しろ」、と言いつけてきた。卒業して数年経過した後、学生にはその意味が少し理解できればと思う。

健康スポーツ学演習、つまりゼミでは、通常の講義形式の授業とは異なり、学生と双方向でコミュニケーションをとり、いろんな問題を検討したりさらには各種の問題にも取り組むことができた。平成23年3月11日に東日本大震災が起こった後、ゼミで何かできることはないかと考えた。歴史を少し研究している者にとって、我々は歴史上未曾有の大惨事に遭遇しており、それを後世の人々に風化させないで、伝える必要があるのではないかと考えた。学生と相談し、東日本大震災に関連する健康やスポーツや体育に関連する新聞記事を洗い出し、半年間をかけてそれを手作りの文集にまとめた。その文集をまとめていく中で、我々の無力を感じつつも、復興支援に際してのスポーツや運動の持つ力を再認識した。また、ここ3年間は、オリンピック・パラリンピックをテーマにゼミを行っている。長野冬季オリンピックの際には文部科学省の外部専門委員として、「冬季オリンピック読本」と「オリンピックパネル」等の作成に携わったことから、今回の東京オリンピックでも、学生とともにオリンピックムーブメントに参画したいと思ったからである。学生たちの真剣な取り組みと努力によって、3年間で「オリパラ・パネル」6枚と「オリパラ・ニュース」7号を発行でき、学内のオリパラ啓蒙活動の一助になれたことを嬉しく思う。また、一昨年度と昨年度、ゼミの学生を中心にしてオリパラ研究会を組織し、ドイツのミュンスター大学からクリューガー教授とフープナー准教授を、オリパラ教育プログラムの講演者としてお迎えした。この両氏は、スポーツ史およびスポーツ教育学の世界的な専門家である。この両氏を招聘したのは、オリンピックとパラリンピックが、その他の国際的競技大会とどのように異なるのか、またどのような理念に支えられているのかを、まずは学生に

しっかりと理解させたかったからである。学生は、それぞれ1週間にわたる両氏の滞在プログラムに積極的に参加し、オリパラに関する生きた知識を得ることができた。2020年に向けて、このような学生を主体としたオリ・パラ教育プログラムが継続することを望む。

平成22年度より、海外研修プログラムとして、ドイツ研修を開始した。ドイツは、近代体育やスポーツ科学発祥の地であり、今、文部科学省を中心に推進している総合型地域スポーツクラブの誕生の地でもある。ドイツ体育大学ケルンや体育・スポーツクラブバイヤーなどを訪問し、健康スポーツ学科の授業内容に直結する生きた知識を学生は習得しているといえる。最初は、フランクフルトの空港や駅の中を、走り回ることもあったが、今は引率していただいた先生方のご協力で大過なく研修を実施できている。来年度の研修で、9回目を迎える。今後も本研修を皆さんで大事に育てていただければと思う。

最後に、健康スポーツ学科の先生方、ライフデザイン学部の先生方、さらには事務局の皆様方のおかげで、何とか3月末日をもって定年を迎えることができそうである。この紙面をかりで、これまでの皆様方のご支援とご協力に感謝申し上げます。



Sayonara Japan

Nicholas (“Nick”) Lambert

Life has been a long journey for me in Japan, particularly in my career at Toyo University. I arrived in Japan in September 1986, spending the next five and a half years at Tokai University as an English instructor in the Foreign Language Center. At that time, many of my classes were in the School of Medicine. After the first year, I also had a part-time teaching job at Aoyama Gakuin (which I continued until the present day).

In 1992 I joined the teaching staff at Toyo University Junior College in the Hakusan campus. In the first year or two, many of the new buildings on this campus were under construction, so at times the shaking of demolished buildings and the drilling and other construction noises were deafening. The Junior College students – almost exclusively female – were cheerful, energetic, and relatively good at English (since I was teaching in the Dept. of English Literature). It was an exciting time at Toyo then, as the campus was revitalized through reconstruction and the school began a major campaign to widen its educational scope and internationalize its syllabuses. To my later pleasure, several of my kind and friendly teaching colleagues joined my future departments once I left the college to enter Toyo University itself

When the new Itakura campus was built, I had the opportunity to join the university as a full-time instructor within the new Dept. of Regional Development Studies. A beautiful rural campus and environmentally and socially significant study content made teaching attractive there. It was also a golden chance for me to teach ESP (English for Specific Purposes) courses focused on geography and development issues. As I had been teaching Geography and History previously in Canada and Zimbabwe, it was nice to be able to expand my teaching content from traditional English language alone.

However, despite the above appeal, I have always considered it important for my teaching to make changes every few years. As a conscious policy, I changed my textbooks for classes every second year – with resultant changes to the lesson content. Also, throughout my career I have considered it beneficial and refreshing to change my actual teaching job regularly. So, when the new Faculty of Human Life Design opened its doors on the Asaka campus in 2005, I transferred to the Dept. of Health Care and Sport. This provided me with new core curriculum in the fields of Health Care and Sport – in which I have always been interested in both as a player and coach.

The students on the Asaka campus – though to be honest generally at lower levels of English proficiency than in previous departments – have been friendly, full of fun and energy, and quite willing to try new activities. So I can say that my teaching on this campus has evolved into an “active learning” style more than in the past. Also having a ぜみ (senior seminar) class for the past two years as well as chaperoning some of the overseas study tours has given me a closer relationship with a core of the students. That has made the teaching both enjoyable and productive.



Seminar party – Ole!!

At the same time, the staff on this campus have been supportive, kind, and forgiving of a foreigner’s mistakes in understanding and communication. I consider myself very lucky to have had this teaching experience and to have made good friendships among both students and staff.

The gradual internationalization of the university – especially following its SGU designation – has meant that the foreign staff have gained more recognition and responsibilities within the university. In other words, we are given more respect for and higher expectations of our contributions to the university. This is a satisfying development, as many of the foreign staff have felt in the past that they had little significant input or power over university policy and programs. As can be imagined, feeling more useful and respected gives the foreign staff more confidence and job satisfaction.

Certainly that is my own feeling, in any case. I regret having to retire when I finally feel that I am being more than a teaching machine! However, it is usually good for a business to bring in younger, fresher staff with new ideas and energy. I feel confident that the current policy and staffing changes at Toyo University will continue to raise the profile of the university and a positive future for everyone.

Finally, I would like to express my deep appreciation for all the kindness and experiences I’ve been fortunate to receive while at the university. I will miss my friends, the camaraderie of my colleagues and students, and life in general in Japan. I look forward to meeting some of you when you are visiting my home country Canada.

東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規

平成17年4月1日

施行

改正 平成19年4月1日 平成21年4月1日 平成27年4月1日 平成27年7月1日 平成29年4月1日

(目的)

第1条 東洋大学ライフデザイン学部紀要『ライフデザイン学研究』(以下「紀要」という。)はライフデザイン学部(以下「学部」という。)の教育と研究を促進し、教員を中心としたそれらの成果発表の場として、さらに「ライフデザイン学」の形成とその発展に寄与することを目的とし、関連の論文、研究ノート、書評、研究展望、学部教育に関する諸活動報告等を掲載発表する。

(刊行物と編集)

第2条 学部で刊行する紀要はライフデザイン学部紀要編集委員会(以下「委員会」という。)内規第4条による。

(投稿資格)

第3条 紀要に投稿できる者は原則として学部の専任教員とする。ただし、以下の場合には、委員会の判断で受け入れることができる。

- (1) 委員会において特別に依頼する場合
- (2) 学部専任教員が代表である共同執筆原稿の場合
- (3) 学部非常勤講師から希望があった場合
- (4) 学部生の執筆で学科または専攻の推薦を得たもの
- (5) 大学院生の執筆で専攻の推薦を得たもの

(原稿の種類)

第4条 この紀要に投稿できる原稿の種類は、次のとおりとし、未発表の原稿に限ることとする。

種類	内容
論文	オリジナルな研究成果をまとめたもの(査読対象とする)
研究ノート	研究の中間報告、覚書および新しい研究方法についての報告、翻訳(投稿者の依頼があった場合、査読対象とする)
書評	書籍、文献の批評、紹介
研究展望	それぞれの研究分野の成果をまとめたもの、研究動向を展望したもの
学部活動記録	当該年度の学部活動を報告する内容のもの
学部教育活動への取り組み	学部での教育内容を評価するもの
大学院生の論文(概要)	大学院生の研究成果
学部生の論文(概要)	学部生の学習成果
総説	ライフデザイン学全般もしくは個別領域にかかわる総括的論述

資料	研究上価値ある資料あるいは新出資料などの紹介・解説
研究報告	社会实践にかかわる活動の研究報告、作品制作の報告、作品解説など
学部プロジェクト研究報告	学部プロジェクト研究の成果を要約して報告するもの

(二重投稿の禁止)

第5条 前条に該当し投稿された第6条に規定する原稿であっても、同一の原稿を本学紀要以外の他紙に投稿することはできない。また二重投稿が判明した場合は掲載を中止する。

2 当該原稿を他紙に投稿する場合は、委員会より正式に不採用の連絡を受けた後に行う。

(申し込みと締め切り)

第6条 投稿申し込みと締め切り期限は、年1回の刊行の場合は次の各号のとおりとし、年複数回の刊行の場合は、その都度委員会が別に定める。

(執筆要領)

第7条 原稿の執筆にあたっては、別に定める紀要執筆要領による。

(原稿の査読と掲載の可否)

第8条 査読は別に定める「ライフデザイン学部紀要査読制度内規」に基づき行う。

2 掲載の可否は、第1項の結果に基づき、委員会が決定し、投稿者へ結果を連絡する。

3 投稿数の制限は定めないが、同一号に原稿が複数採択された場合、次号に繰り延べて掲載することがある。

4 掲載が決定した全ての原稿について、著者は以下の内容に同意し、東洋大学学術情報機関リポジトリへの登録を承諾したものとする。

(1) 論文を電子的に複製すること

(2) インターネットでアクセスできるようにすること

(補筆と修正)

第9条 委員会は、必要に応じて、執筆者に補筆や修正を求めることができる。

(原稿の返却)

第10条 投稿された原稿は、執筆者に返却する。

(配布先等)

第11条 紀要の配布先は、毎年委員会が定める。

2 執筆者には、完成した紀要を電子媒体にて1部配付する。

3 学部ホームページに電子情報として掲載することができる。また管理サーバー等の掲載条件が可

能な範囲でデータは蓄積する。

(原稿料など)

第12条 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。

(著作権等)

第13条 本学部が編集刊行する紀要の編集著作権は本学部に帰属する。

2 紀要に掲載された個々の著作物の著作権は、当該著作物の著作権者に帰属する。

3 紀要に掲載された個々の著作物について、著作権侵害、名誉毀損、またはその他の紛争が生じた場合、当該著作物の著作者を当事者とする。

(改廃)

第14条 本内規の改廃は、教授会の承認を得るものとする。

附 則

この内規は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年7月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成29年4月1日から施行する。

東洋大学ライフデザイン学部査読制度内規

平成17年4月1日

施行

改正 平成19年4月1日 平成27年4月1日 平成28年4月1日

(目的)

第1条 本内規は、東洋大学ライフデザイン学部（以下「学部」という。）の刊行する『東洋大学ライフデザイン学研究』（以下「紀要」という。）と掲載される個々の著作物の質の向上と保証を図ることを目的とし、査読制度により審査を行う。

(査読の対象)

第2条 査読は、論文および投稿者より審査依頼がなされた研究ノートについて行う。査読された原稿についてはその旨を明記する。

(査読の内容)

第3条 審査原稿について、東洋大学ライフデザイン学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）の定めた学部内および学部外各1名の査読員による体裁、学術的内容の審査を行い委員会に結果を報告する。

2 東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規第4条の査読対象としない原稿について、委員会が定める学部内の校正委員1名により、体裁、内容の校正について委員会に助言を行う。

(査読員の要件)

第4条 学部内査読員は、学部専任教員とする。

2 学部外査読員は、その著作物の内容についての専門領域における学部外の専門家又は学識者で、以下のいずれかに該当する者とする。

(1) 大学教員である者、または大学教員であった者

(2) 専門領域における研究業績を有する者。なお研究業績の基準については、本学講師以上を原則とする。

(3) 紀要編集委員会で認められた者

(査読員の委嘱)

第5条 第3条について、委員会は査読員、校正委員を選出し、学部長により委嘱する。

(査読員の非公開)

第6条 学部内査読員については、いかなる理由であっても公開しない。

2 学部外査読員については、紀要に採択の上、掲載されるときに限り各著作物の巻末に査読員を掲載する。

(審査)

第7条 2名の査読員は、執筆者の原稿について速やかに査読の上審査を行い、ABCで評価する。Aは「採択(軽微な字句の修正を含む)」、Bは「一部修正の上採択」、Cは「不採択」を意味する。又、その結果を委員会に報告する。

2 2名の査読員がAA、AB、BBの評価の場合は査読審査合格とし、掲載可とする。BC、CCの場合は査読不合格とし、掲載不可とする。ACの場合はさらに第3者に査読を依頼し、A又はBの場合は掲載可とし、Cの場合は不合格とする。

3 査読審査結果は委員長より通知する。

(修正)

第8条 委員会は、上記の審査結果に基づき、採用論文について執筆者に修正を求めることがある。それ以外は審査後の修正は認めない。

(審査料)

第9条 学部外査読員には次の査読審査料を支払う。

(1) 原稿1本につき10,000円とする。

(改正)

第10条 本内規の改廃は、教授会の承認を得るものとする。

附則

この内規は、平成17年4月1日から施行する。

附則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

附則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

附則

この内規は、平成28年4月1日から施行する。

東洋大学ライフデザイン学部紀要原稿執筆要領

平成17年4月1日

施行

改正 平成19年4月1日 平成27年4月1日

1. 使用言語

使用言語は、特に制限しない。ただし、印刷等にあたり特別の技術を有する言語、査読委員の選出に困難を来す言語、その他の事情を有する言語については、事前に編集委員に相談すること。また母語以外を使用する場合には当該言語のネイティブ・スピーカーによる校閲を受けたいうえで提出することとする。

2. 執筆者

投稿資格者は、東洋大学ライフデザイン学部紀要編集内規第3条に定める者とし、共著者がいる場合は氏名の右肩に*印を付けて示すこととする。

3. 要旨及びキーワード等

原稿の本文が日本語の場合には、欧文（英・独・仏のいずれか）の表題、著者名、要旨及びキーワードをつけること。欧文要旨は100～150ワード程度とする。

原稿の本文が英語又はその他の言語の場合には、各言語の要旨、キーワードのほかに、日本語の表題、著者名、要旨及びキーワードをつけること。日本語要旨は600～800字程度とする。

欧文要旨は、当該言語のネイティブ・スピーカーによる校閲を受けることとする。

4. 本文及び脚注・注

本文は原則として横書きとし、英語の場合はダブルスペースで記述する。原稿用紙の大きさはA4サイズを標準とする。長さは日本語の場合はA4用紙30枚を超えない程度とする（いずれの場合も図表を含むものとする）。他の言語の場合もこれらに準ずる。以上の内容に依りがたい時は編集委員と協議して決めることとする。

脚注は、本文中の該当箇所の右肩に一連番号を打ち、注そのものは当該ページの下部に記入する。各章毎、あるいは本文末に注をまとめる場合も、注番号は当該箇所の右肩に一連番号で示すこととする。

提出時に総字数を示すこととする。

5. 参考文献

参考文献は、原則として以下の要領で記載する。

(1) 和文の参考文献

① 雑誌

著者名、表題、雑誌名、巻数（号数）、（刊行された西暦年）

② 単行本

著者名、署名、発行所、ページ数、(発行された西暦年)

③ 編著書の中の1章又はシリーズの中の1巻

著書名、章名、編者(又は監修者)名、書名、発行所、ページ数、(刊行された西暦年)、
又は著書名、書名、編者(又は監修者)名、シリーズ名、第XX巻、発行所、ページ数

④ その他の参考文献については、上記①、②、③に準ずる。

(2) 欧文等の参考文献の場合

上記(1)に準ずる。ただし、書名などについては、主な単語(Word)、固有名詞などは大文字で書き始めること。

6. 図表

① 図は著者の作成したものをそのまま印刷するので、黒インクで浄書(トレース)すること(ワープロ印刷でも可)。トレース等が困難な場合にはトレース料は自己負担とする。

② 図は、なるべく白紙に黒インクで大きめに書くこと。又、各図は一枚毎に別々の用紙に書くこと。

③ 図中の文字数字等は写植されるので、正確に書くこと。大文字と小文字、イタリック体、ゴチック体などの違いにも注意すること。

④ 図(写真を含む)及び表には必ず名称を付けること。

⑤ 図表の番号は、それぞれが本文に現れる順にしたがって、通し番号で付けること。又、本文中の各図表の挿入箇所は明確に指示すること。

⑥ 各図表の作成に使用した資料あるいは文献は、必ず注として明記すること。

7. 原稿の提出

原稿はテンプレートに添って入力したものをハードコピー3部及び電子データで提出するものとする。電子データには、著者名を記述する。写真や図表を原稿に組み込まないで別途提出する場合は、挿入位置を指定すること。

8. 改廃

本要領の改廃は、ライフデザイン学部紀要編集委員会の議を経て行うものとする。

附 則

この要領は平成17年4月1日から施行する。

附 則

この要領は平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要領は平成27年4月1日から施行する。

ライフデザイン学研究第13号 編集委員

内 田 千 春 (生活支援学科)

大 木 裕 子 (健康スポーツ学科)

菅 原 麻衣子 (人間環境デザイン学科)

吉 浦 輪 (生活支援学科)

Editorial Board

UCHIDA Chiharu (Department of Human Care and Support)

OKI Yuko (Department of Health Care and Sports)

SUGAWARA Maiko (Department of Human Environment Design)

YOSHIURA Toru (Department of Human Care and Support)

ライフデザイン学研究 第13号

2018年3月31日発行

発行者 東洋大学ライフデザイン学部

〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

TEL048(468)6311(代) FAX048(468)6320

印刷所 株式会社 美巧社

Journal of Human Life Design

NO.13

Contents

HONNA Yasushi Prefatory Note	3
Messages from Retired Persons KAKUTO Chizuko, SAKAGUCHI Masaharu, SHIRAIISHI Hiromi, MATSUO Junichi, LAMBERT Nicholas	4
Review MATSUO Junichi On the Sportsfestivals of the Middle Ages and Modern times in Germany	15
Articles ITO H Mika Depiction of Fathers and Mothers in Monthly Picture Book "Kodomo no Tomo"	31
Oh Eun-Hye Korean mental health service: The history, current and future perspectives	49
OKI Yuko Cultural consumption for senior generations—Analysis of International Music Festivals—	77
KIKUCHI Noritaka La légende transformée de Willis sur la scène de <i>Giselle</i>	93
KOREEDA Kiyoji, KAKUTO Chizuko, SUGITA Kiyoko, SUZUKI Sakiko Support for Children with Special Educational Needs During Early Childhood	107
SHIGETA Fumie Consideration on the "providing information for user selection" judging from the history of the third party evaluation on welfare services in Japan	133
Shizuko TAKAYAMA A Discussion on the Environmental Quality of Childcare Training Classroom—From the Perspectives of Similarities and Differences between the Classrooms and Community Childcare Support—	159
TAJIRI Yuki, MORIZAWA Ryoosuke Études sur la tentative de carée (kosodate-hiroba) : le système communautaire de soutien parentalité par les sections pour jeunes enfants des instituts médico-éducatifs	175
FUJII Mikio Educational effects of active learning in teacher training course—from the results of cooperative and exploratory learning in an "Educational system theory" class on teaching profession subjects—	189
WATANABE Hiromi The Utilization Rate of "Night Home Help" and "24 Hour Routine Home Visit Service" in Japan	215
Research Notes UCHIDA Chiharu A report on Early Childhood Education Quality Improvement System to support professional development of early childhood staff in State of Colorado, U.S.A.	241
KANEKO Motohiko, MORIKAWA Hiroshi, SUITA Masashi The Study of Coaching relating to the instruction of disabled players in sports —thorough the interview with coaches—	257
KAKUTO Chizuko, HOSHI Nagae, KOSUGE Keiko A Research on a New System "Kindergarten and Nursery School Collaborative Certified Centers for Early Childhood Education and Care"—Through researches for 10 years on "A" kindergarten and nursery school collaborative certified centers for early childhood education and care—	269
KUNISHIGE Tomohiro "Kakawari" of Psychiatric Social Workers in the Social Support Center for the Person with Disability during the Discharge Support: Analysis of Interviews with Long Term Hospitalized Psychiatric Patients	285
KOREEDA Kiyoji, SUGAWARA Maiko, KAKUTO Chizuko, SUZUKI Sakiko, HASEGAWA Mayumi Inclusive Education System in Denmark: A Review of Special Schools and Nursery Schools in Fyn and Aarhus Areas	297
HONNA Yasushi, HISATA Hazuki, YAMANAKA Sati A study of collaboration between guidance officers and servis management officers concerning welfare for persons with disabilities	323
MINAMINO Natsuko Diversity of children who need special education and support —non-Japanese children with disabilities	337
YAGI Yuko Research on the DCAT response to the Kumamoto Earthquake	349
YAMASHITA Rei, SUGITO Maho, MAEDA Shu, MATSUYAMA Kei, KURANAMI Kaori Relationship between Sport and Urban Parks in Japan: Increasing the Population for Participating through Sport	359
Research Report SHIGENARI Takeshi Current State and Subjects of Production and Adaptation in Wheelchairs and Seating systems	375
TAMURA Chieko Ph.D The relationships between the memory of pregnancy and giving birth and the cognition of child rearing. —The suggestion of new way to support for mothers—	395
Research Project Reports in the Faculty of Life Design HONNA Yasushi, YAGI Yuko, IWAMOTO Sayumi, SHIGENARI Takeshi A study of the use of social welfare equipment in nursing care facilities and its effect on prevention of lower back injuries	415
MINE Yasuhiro, MIZUMURA Hiroko, KOREEDA Kiyoji The Study on the Potential of Life Environment Design Education and the Investigation of the Welfare Services for Persons with Disabilities in French-Speaking Countries	419
SHIGENARI Takeshi, WATANABE Hiromi A Study on design and adjustability of the Tilt and Reclining Chair for the Elderly	437